

『独逸語学講話』 著者 関口存男
発行所 日光書院 昭和 14 年 6 月 7 日発行
昭和 15 年 11 月 25 日再版
昭和 17 年 2 月 12 日三版

搬動詞 [Lativum] (Seite 42 - 51)

搬動詞と云う名称は私自身が必要に迫られて講座、文法書等で用い始めたもので、何時か一度詳しく其の意味を説明し、同時にそれがドイツ語の文法で如何に重要な役割を演じているかを指摘したいと思っていたのです。-----殊に私が度々用いる『意味形態』と云う根本概念をなおも明確に突きとめて行くには非常に好都合な Thema であろうと思います。

まず順序として、既に講座。文法書その他で簡単に説明した事柄を、もう一度説明して、それから詳細に移ろうと思います。

搬動詞 Lativum

まず、突然ですが、日本語的な考え方から見ると多少奇異な感じを抱かせるような語法から出立して述べることにします。

Er ist es, der mich vor Jahr und Tag an diesen Posten geschwätzt hat.

[数年前、なんだかんだ云って俺をこんな任地に来させてしまったのは、実は彼奴なんだ。]

schwätzen はお饒舌りする意味の動詞ですから、上文を直訳するとすれば、『数年前おれをこんな任地へ饒舌ってしまったのは彼奴なんだ』となりましょう。私を任地へ饒舌ってしまうと云うのは、砕いて云えば、お饒舌をする事によって私を任地につけたということです。換言すれば Er ist es, der mich vor Jahr und Tag durch Schwätzen an diesen Posten gebracht hat ということです。schwätzen は、茲では普通の schwätzen ではなくて、schwätzend bringen であると云う風に解釈を加えても構いません。

なおもう一つの例を挙げます。

Der liederliche Bursche hat seine alte Mutter ins Spital getanzt.

[此の道楽息子は、あんまりダンスに凝ってしまって、遂には老母に貧民院に這入るような憂き目を見させてしまった。]

これはまあ、文章としては少し奇抜かも知れませんが、搬動語法という文法形態がある以上は、こう云う事を云っても差しつかえないので、或種の場合には、こう云う風に云うと非常に面白さが生ずるのです。たとえば、その直前に Er war ein leidenschaftlicher Tänzer, und nach einigen Jahren.....(かれは非常な舞踏狂であった、そして数年後には.....) などとくれば、その次には hatte er seine alte Mutter ins Spital getanzt と云うのが極く自然でもあり、また気も利いているでしょう。

この sie ins Spital tanzen と云う結合は、云い換えれば、前にやったのと結局同じ事で、sie durch Tanzen ins Spital bringen 或いは sie über dem Tanzen ins Spital bringen (踊りに気

を取られているうちに彼女を貧民院へ入れてしまう)と云う事で、**bringen** と云う概念がつけ加わっている、と云うよりは寧ろ単に **bringen** を他の勝手な語で言い換えたのであると云う事が出来ます。これを一般化して申しますと、ドイツ人特有の語法として、**ins Spital** とか **an den Posten** とか、その他とにかく到着点、落ちつく先の点、或いは運動の方向を明示する句或いは語が既に用いてあると云うと、**mich** (私を)とか **die alte Mutter** (老母を)とか云ったような四格が置いてあるという、動詞はもう兎に角 **bringen** とか **werfen** とか **tun** (= **bringen**)とか **legen** とか、とにかく『搬び動かす』という意味の動詞であることが明瞭であるから、その明瞭性を基礎にして、(わかり切ったものとして、)その位置に兎に角どんな動詞を持って来ても構わないのです。これらの、其の時々の勝手気儘な動詞は、その元来の意味はどうあるにせよ、其の場合にはすべて **bringen** を基礎にした意味になるわけです。動詞のこうした用法を私は搬動語法と呼んで置こうと思います。只今述べたところの例だけでは、なんだか非常に特殊な事柄で、文法書の一般問題などには一見何の関係もないように考える人があるかも知れませんが、それは段々と説明していけばわかります。ちょっと **vorwegnehmen** して云えば、たとえば **sich durch's Leben schlagen** とか、**sich zurechtfinden** とか、**sich hineinschleichen** などと云う **sich** がどう云う訳で附いているかを説明するには、どうしても此の語法から出立しなければならないでしょう。

搬動語法の特徴

さて、搬動語法の特徴ですが、これからの説明を充分理解せんがためには次の三項をはっきりと念頭に置いて聴いて頂く必要があります。

- [1] 必ず四格の補足語がある。(前例で云えば **mich**, **die alte Mutter** 等。)
- [2] 必ず方向を指す状況規定がある。(**an diesen Posten**, **in das Spital** 等、即ち **an**, **auf**, **in**, **unter** 等ならば必ず四格支配-----但し **aus**, **zu**, **von** 等は然らず。)
- [3] 動詞は必ず其の意味形態が **bringen** である。(意味は各々違うが、意味形態は共通である。)

備考 : もっとも、**helfen** だけは元来が三格の補足語を取る故、これだけ補足語が三格です。たとえば **Er hilft mir in den Wagen ; er hilft mir aus der Not ; Wer hilft mir auf die Beine ?** (誰か俺を助け起こしてくれる奴はいないか?)

結果挙述の形容詞を伴う語法と混同すべからず

四格を伴うという点に関して一つ注意して置きたいのは、この **Lativum** (搬動詞) とよく似た他の場合があることです。たとえば :

Auf deinem Kopfe könnte man die Nägel gerade klopfen.

[おまえの頭は、金槌で叩いて釘の曲りを伸ばすために台にしても好いほど固い、ということ。]

この際 **gerade klopfen** (真ぐに叩く) というのは、叩いて真ぐに『する』ことです。云い換えれば **klopfend gerade machen** の意です。これは **bringen** とはちがいます。此の際は方向を指す言葉ではなくて、**gerade** などと云う結果の状態を指す形容詞があるのが特徴です。四格が必ず無くてはならない点も大変搬動語法と似ていますが、動詞の意味形態が **bringen** ではなくて **machen** である点がちがいます。此の点は特に混同しないように

ねがいます。(此の語法も実は非常に重要な形態で、文法に重要な関係があるのですが、またこれは他の機会に述べることに致しましょう。)

両者の区別をなおはっきりさせるために、なおもう一つ例を引いて見ましょう。たとえば、『彼は窃と部屋から抜け出した』というのを、**stehlen** (盗む)という語を用いて：
Er stahl sich aus dem Zimmer.

と云います。この際は別に **stahl** を **brachte.....stehlend** などと野暮に言い換えなくたって、日本語で『彼はかれ自身を部屋から盗み去った』と云っても略々其の構造がわからぬことはない。すなわち此の際は **stahl** は搬動語法に用いたものです。方向を指す句は **aus dem Zimmer** で、四格は再帰代名詞の **sich** です。ところが、同じ **stehlen** を用いた次のような俚諺がある。

Ein Dieb stiehlt sich selten reich.

これは丁度日本語の『悪銭身につかず』に該当します。直訳すれば、泥坊が、盗むことによって自身を金持にすることは古来稀である、という構造です。この **stiehlt** は **bringt** ではない、**macht** です。**Ein Dieb macht sich selten durchs Stehlen reich.** ということです。搬動語法でないことはすぐわかるでしょう。第一方向を示す句がなく其の代りに **reich** という形容詞がある点を考えればその区別が益々明瞭になるでしょう。

この両者を一括して考えて見るといって、両者とも；或いは形容詞、或いは方向規定が、動詞によって示された動作の後に生ずる『結果』(Ereignis; Resultat)を示しているという点では同一だけれども、その結果の様子が少しちがっていて、形容詞を伴う方は『結果として生ずる状態』であるが、搬動語法の方は『結果として到達する位置』(或いは後でも述べるように、時には、到達するために辿る経路)です。

けれども、そんな理屈は云わなくても、要するに一方は動詞の意味形態が **machen** であり、一方は **bringen** であると云えば、それが一番よく消息を語っています。

さて、以上で搬動語法なるものの本質は明らかになりましたから、次には、その語法には如何なる種類があるかと云う事を研究して行きましょう。

前綴が方向を指示している場合

先ず一番やさしい場合から述べます。**bringen** という意味形態が最も簡単に現れるのは、まず動詞に前綴がつく場合です。たとえば **aufschrecken** という他動詞がある。**Der Pistolenschuß schreckte mich auf** と云えば、拳銃の音が私をはっと目覚ました。或いは、飛び上がっておどろいた、と云うことです。此の際、**auf** は、ちょっと考えればすぐに判りますが、到達する位置を指しています。つまり私は其の時までは地上に横たわっていたと思っていいでしょう。ピストルがポンと鳴ると、誰だって、ハッと身を起こします。だから **auf** という前綴がついているわけです。自働詞の場合(即ち四格を伴わない時)にもそういうのがある、**auffahren** (はっと起ち上る、さっと飛び上る、いきり立つ) **aufstehen** (立ち上る) **aufsehen** (眼をあげる、顔を上げる)などがみなそれです。こんなことは極くあたり前ですが、意味形態としては注目する必要があります。

同じようなのを少し並べて見ると：

[1] **Ihm ist es ein Leichtes, seine Antagonisten niederzureden.**

[相手を沈黙せしめる位のことは、彼にとっては朝飯前の仕事だ。].....**niederreden** などという動詞があるわけではなくて、時に応じて勝手に造ったのです。つまり『論じ倒す』のこと。

[2] Er winkte eine Taxameterdroschke herbei.

[かれは円たくを招き寄せた。]

[3] Meine Frau hata mir diesen schreienden Hut aufgekneifert.

[おれの嬢めが、やかましく云って、到頭おれにこんなキザな帽子を冠らせてしまいやがった。]

[4] Man hat ihn höflich hinauskomplimentiert.

[人々はいとも懇懇に会釈しながら、体よく彼を追い出してしまった。]

[5] Es gibt kein "Sein" hinter dem Tun, Wirken, Werden; der Täter ist zum Tun bloß hinzugedichtet-----das Tun ist alles.
[Nietzsche, Genealogie der Moral]

[行為、活動、生成の背後に実在が存すると考えるのは間違いである。行為『者』なんてものは、行為に対して単に空想でつけ加えられた蛇足にすぎない。-----行為が総てである。]

第五は少しむずかしいかも知れませんが、要するに、たとえば『私』という何だか厳然たる中枢が存在するように思っているのは間違いで、厳密に云えば、其処には単に私の『怒り』とか私の『幻滅』とか、とにかくその他の多くの私の何とかいう動ける現象が存在するのみだ、私その者というものは其等を離れてはないと云うことです。

要するに、前綴が herbei, hinzu, vorüber, hinan 等の、何等かの方向或いは目標を示していさえすれば、それに伴う他動詞はたとえどんな意味のものでも結局は bringen という意味形態になってしまうのです。たとえば、herbei を用いて見ると、その次にどんな動詞を置いても宜しいので、Ich habe ihn herbeigerufen と云うのと同じように、もしベルを押して呼んだのなら herbeigeklingelt, herbeigeschellt, おびき寄せたのなら herbeigelockt, herbeigeködert、日本人はよく手を叩いて女中を呼ぶから、herbeigeklatscht ということも云えるわけです、珈琲店のがやがやしたところでは唝鳴った位では聞こえないから、コップを匙でカチカチ叩いてボーイを呼ぶが、これは herbeigeklirrt でしょう、地団駄を踏んで呼んだとすれば herbeigestampft です。

これらの分離動詞は勿論みんな辞書にあるわけではありません。その時々によって造って行くのだから、それをどの程度にまで辞典に採録するかは全く編纂者自身の感じと紙面の経済の問題です。どうせ全部盛るわけには行きはしない。この点がつまりドイツ語の語彙の登録を非常に困難ならしめる点なのです。-----だから、herbeistampfen, herbeipfeifen, herbeiläuten, herbeiködern などという、相当用いられる癖に辞書に全然出て来ない搬動語法は、これはつまり文法なのであって、語彙の問題ではないのです。groß は登録してあるが、großes や großen や großer や größerer, größere まで登録してあるドイツ語の辞書は一つもない、また無いのが当然であるように、私が只今説明している意味形態としての搬動語法は、辞書学ではなく、つまり一つの文法なのです。しかもかなり一般的な文法なのです。ドイツ語の動詞の恐らくは三分の一か、四分の一位の量を意味形態的に説明してその内部機構を明らかにするための重要な範疇なのです。

再帰動詞としての Lativa

学理上の問題を離れて、実用文法の範囲を考慮した際に、非常に重要なのは再帰代名

詞を四格補足語する *Lativa* [搬動詞]です。何故と云うに、たとえば、前にも一寸引用したように sich durch die Welt schlagen (闘いつつ人生を渡る)とか sich durch die Menge arbeiten (人山を掻き分ける)とか sich hindurchkämpfen (血路を切り拓く)とか云ったような既成の或種の再帰動詞に接しても、この *Lativum* なるものに対する理解が無いと、それらの schlagen とか kämpfen とか arbeiten とか云ったような動詞に何故 sich なんてものが附くのだか、全然説明されないと思います。説明は学問の方の問題だが、実用語学の見地から云っても、それらの句を、ドイツ人がそれらの句に対して持っている通りの語感と内的理解を持たずに用いることになって、結局、正しい理解が得られないと云うことになるばかりでなく、現在ドイツ人が其の時其の時の必要に迫られて拵えつつある *Neubildung* (新語)に接するたびに一々面喰わなければならないと云うことになる。とにかく色んなことになる。-----ドイツ人が既に拵えたものや、元っから在るものを教えるのが辞書で、ドイツ人が拵えるのと同じ筋路を以て別に拵えることを教えるのが文法であるとすれば、**意味形態の研究**こそは、これが本当の文法ではないでしょうか。

扱て、只今の、たとえば sich durch die Menge arbeiten を例に取って説明すると、既に今までに述べた一般的法則から考えてすぐわかるように、これは謂わば sich arbeitend durch die Menge bringen です。一生懸命に藻掻く (arbeiten) ことに依って自分自身を群衆の間を貫いて向う側にまで運んで行くことです。arbeiten が実は arbeitend bringen の意味だから、そこでどうしても sich という四格が無くてはならないのです。

た他の例でいうと、sich wagen という再帰動詞がある。wagen だけでちゃんと『敢行する』『冒険する』『こわごわ行こう』という意味を持っているのに、それにまた sich が附いている。自分を敢えてする、では意味をなさない。*Lativum* と考えて始めて意味形態がわかる。-----*Lativum* である以上は、前述の通則に従って、必ず方向規定がなければならないから、Er wagt sich だけでは意味をなさない。Er wagt sich hinein (恐る恐る中へ這入って行く、敢然として飛び込む)とか、Er wagt sich in die Welt とか Er wagt sich aus dem Zimmer とか、その他何か方向規定が必要です。たとえば、こわごわ馬に乗って見るのなら、sich auf den Sattel wagen でしょうし、危険を犯して国境を越えるのなら sich über die Grenze wagen でしょう。次にそうした例を二三並べて見ます。

[1] Ein Fremder findet sich in dieser labyrinthischen Stadt ohne einen Führer icht leicht zurecht.

[外来者は、この迷宮の如き市では、案内者を連れしないと容易に勝手が解らない。]
sich zurecht は、発見しつつ自分を正しき個所にもたらす事です。

[2] Der Marxismus fraß sich tief in den Geist der jungen Leute.

[マルキシズムが深く若い人々の頭の中へ食い込んだ。]

[3] Er besaß die glückliche Gabe, sich schnell in jede Situation finden zu können.

[かれは、どんな場合にも咄嗟の間に局面に対応善処できるという得な天分に恵まれていた。]

[4] Der Mensch lebt sich schließlich in jedes Milieu ein.

[人間はどんな環境にでも結局は順応するものである。]

[5] Das Feuer brach im Erdgeschoß aus und die Flammen leckten sich an der Fassade empor.

[階下で発火して、炎は表通りに面した壁を伝ってぺろぺろと上の方へ燃えひろがって行った。]

[6] Der Straßenfeger hat sich zu einer der angesehensten Finanzgrößen emporgearbeitet.

[街路掃除人夫が努力して財界一流の名望家に成り上った。]

[7] Sie sprang in den Kahn und ruderte sich bis mitten auf den See.

[彼女は小舟に飛び乗って、遙か湖心にまでも漕ぎ出でた。]

[8] Sie sitzt noch immer zuhause und träumt sich in die Ferne.

[彼女はまだ相変らず家に燻ぶっていて、想いを異郷に馳せている]

[9] Wir fragen uns nach Kemmerich durch.
[Remarque, Im Westen nichts Neues.]

[僕たちは人に道を尋ねながらやっとケンメリヒのいるところへ辿りついた。]

[10] Der Pfeil bohrte sich in die Brust des Gegners.

[矢は敵の胸を抉った。]

搬動語法の難例

既に搬動語法という形態があるというのと、其の形式を着て、おしまいにはかなり大胆な結合を敢てするようになります。殊にドイツ人と云う人種は、朦朧とした思想を朦朧と表現するのが好きな人種ですから、文法上許されようと許されまいと、ちょっとでも一般に認められた幽[かす]かな筋路がありさえすれば、なり思い切った結合をも敢て辞さない。

Wir mußten uns seit einer Stunde die Beine in den Leib stehen.

何の事だかわかりますか？説明も一寸簡単には行きませんが、とにかく『立ちくたびれた』ということです。両脚を胴体の中へと立ってしまった.....と云うのは、たとえば尖った鉛筆二本を立てて、その上にお饅頭を載せたと考えてごらん下さい。お饅頭にはお饅頭の重みがあるから、しばらく放っておくと段々下の方へさがる、泡遅鉛筆はお饅頭の中へ這入ってしまうでしょう。-----日本人なら、鶴首して首が天井についてしまったとでも云うところでしょう。

Denn man redet sich in die Liebe hinein, wie in den Zorn, wenn man ihre Gebärde macht.

[R. Musil, Der Mann ohne Eigenschaften, 494.]

ihre は Liebe を受けています。如何となれば、立腹の表情をして見ると臆[やが]て本当に腹が立って来るのと同様に、うっかり惚れたような事を言っていると遂には本当に惚れたと思ってしまうものであるという意味です。

So ging dieser Mann zu Grunde. Man kann sagen: weil er ein Künstler war. Denn die Menschen haben die Gewohnheit, die Künstler aus der Welt zu ekeln. Vielleicht aber ist dies Hinausekeln gar nicht der Menschen Bosheit, sondern Gottes heiliger Wille. Denn wenn der Kreisel nicht geschlagen wird, dann brummt er nicht. [Frenssen, Jörn Uhl.]

[斯うして此の男は破滅したのである。芸術家なりしが故に破滅したと云ってもよかろう。何故ならば、一たい人間共は芸術家達に対して、彼等が結局娑婆に愛想尽かしをして出て往ってしまうように仕向けるものである。こう云う仕打ちは、或いは別に人間が意地悪いからでなくて、むしろ神意なのかも知れない。独楽は鞭打たなければ唸りを発しないとされたものだから。]

この例の **ekeln** は、その用法をはっきりと念頭に置いて考えないと、これが正しい用法であることがわかりません。即ち、普通の言い方で云えば **Die Menschen ekeln mich** (私は人間共がいやになった) という用法です。だから **ekeln** は『嘔吐を催おす』ことではなく、『催おさせる』ことです。だからつまり上のような翻訳になるわけです。